

ユニバーサルデザインの視点に立った

「わかる」授業づくり 実践事例集

生徒が「わかる」「できた」を
実感できる授業づくりのために



青森県立北斗高等学校（定時制）

令和3年3月

はじめに

よく考えてみると、「わかる授業」というのはごく当たり前のことです。授業は生徒たちが「わかる」から授業なのであって、「わからない授業」というのは自己矛盾とも言えます。

とはいえ、実際には、多種多様な生徒の全員が「わかる」授業をするのは至難の業です。特に、本校のように特別な支援を要する生徒が多く在籍する学校にあっては、なかなか一筋縄ではいかない状況にあります。

それでも、本校の教員は、一人でも多くの生徒が「わかる」授業づくりに向けて、日々工夫を凝らした授業を展開しています。

本校定時制の課程では、学校経営方針の一つに「特別な支援を要する生徒に対する指導・支援」を掲げ、その取組体系を「北斗スタンダード」と名付け、組織的・継続的な取組を進めています（次ページ参照）。「わかる」授業づくり、ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくりは、その体系の中でも最も基本的な取組として位置づけています。まずは毎日の授業を生徒が「わかる」ようにしていくことで、生徒がきちんと登校し、意欲的に学習に取り組むことを目指しています。

本校では、平成29年度（2017年度）に『ユニバーサルデザインの視点に立った「わかる」授業づくり 北斗高校版マニュアル』を作成しており、これに基づいた授業の工夫をしてきましたが、今回、本校教員が取り組んできた実践事例をまとめて紹介する冊子を作成することとしました。

本冊子が、本校のみならず、多くの学校の先生方の参考になれば幸いです。

本校における「わかる」授業づくりは、まだ発展途上にあります。どうか本冊子を読まれた感想や忌憚のないご意見をお寄せくださるようお願い申し上げます。

青森県立北斗高等学校 校長 渡部 靖之

校訓

教育目標

自主
協和
研学

自己有用感

コミュニケーション力

社会人として
しっかりと生きていく力を育む。

基礎学力

令和2年度学校経営方針

単位制・定時制の特色を生かした、きめ細やかな教育活動の展開

個々の生徒の可能性を引き出し、伸ばすキャリア教育

特別な支援を要する生徒に対する指導・支援の充実
〈北斗スタンダード〉

地域とともにある学校づくり

北斗スタンダード

特別な支援を要する生徒に対する指導・支援の体系

全体の指導・支援

- 「わかる」授業
ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり
- 生徒個々のモチベーションを高める学習評価
ルーブリック評価の導入

個別の指導・支援

- 日常的な教育相談
- S S Wによる教育相談

ニーズに応じた指導・支援

- 通級による指導

個別の指導計画

合理的配慮

生徒個々に関する情報の共有

目次

この冊子を作った背景

p.1

ユニバーサルデザインとは？

ユニバーサルデザインの視点に立った授業とは？

p.3

ユニバーサルデザインの視点に立った

1 授業の流れ、組み立てを生徒に示しています。《時間の構造化》

p.5

授業の流れや組み立てを事前に生徒に示したり、毎時間決まった手順にすることで、生徒はその授業時間中の「自分の過ごし方」がわかるため、学習活動の「迷子」になることなく、安心して授業を受けられます。

2 板書の仕方を工夫しています。《板書の工夫》

p.9

板書の文字の大きさに気を付けたり、チョークの色を使い分けたり、板書のルールを決めたりするなど、板書の仕方を工夫することで、視写や書字が困難な生徒の負担を軽減することができます。また、板書の書き写しそのものを減らすために、プリントを活用することも効果があります。

3 指示の仕方に配慮しています。《指示の配慮》

p.12

授業中の指示のコツは、「明確・簡潔・繰り返し」の3点です。先生の指示が曖昧だったりわかりにくかったりするだけで不安になり戸惑ってしまう生徒もいます。また、音声だけの情報を理解することが苦手な生徒もいます。先生の意図が全員に伝わるよう、板書で示したり、必要に応じて書画カメラを使ったりするなど、指示の仕方に配慮します。

4 課題プリントの作り方を工夫しています。《プリントに関する配慮》

p.15

授業で使う課題プリントを作成する際は、単に問題だけを並べるのではなく、答えのヒントやキーワードを示すなどの工夫があれば、生徒はより解きやすくなります。また、基本問題を繰り返し提示するなどして、基本の反復による生徒の達成感を高めることも大切です。

5 情報機器を活用しています。《視聴覚機器・教材やICTの活用》

p.17

必要に応じて、パソコン、タブレット、プロジェクター、モニター、書画カメラなどのICT機器を活用します。そのために、ソフトやアプリについて研究し、それぞれの機能を生かした効果的な活用をするようにしています。



授業の実践事例

6 そのほか、こんな工夫もしています。

p.22

■ 学習の到達度を知る工夫として

小テストを実施して前時の復習をしたり、授業の終わりに「ふりかえりシート」を書かせたりすることで、授業内容の定着を図ることができます。また、「ループリック評価」を取り入れて、生徒自身が学習の到達度を評価することも効果的です。

■ 生徒が発表しやすくするための工夫として

授業で指名されたり、発表することを恐れる生徒がいます。どの生徒も安心して発表できるようにするため、予め発表の予告をしておく、発表内容を事前に紙に書いておくなど、「発表のハードル」を下げる工夫をします。

■ 協働的な学びを促進するために…

教師—生徒という関係だけでなく、生徒同士で学び合う場面をつくることも大切です。二人組のペア学習や数名で行うグループ学習を通して、生徒はお互いに学び合うことができます。また、グループ学習の場合は、それぞれの得意なことを生かし、苦手なことを助け合う学習活動を行うことで、協働的な学びの体験が得られ、また自己肯定感を高めることにもつながります。

参考 ユニバーサルデザインの視点に立った「わかる」授業づくり (2017)

この実践事例集は、本校教職員にアンケートを実施し、その結果を基に作成しました。この事例集で紹介した実践は個人の創意工夫により行っているものですが、本校全体で取り組もうとしているところです。教科の特性、生徒の状況によって指導内容が異なるため、全ての授業で行っているわけではないことをあらかじめご了承くださいませよう、よろしくお願いいたします。

この冊子を作った背景

本校には、発達障害等の特性を持つ生徒や、中学校時に不登校だったため学習空白がある生徒、特別支援学級に在籍していたあるいは別室登校だったため一斉授業に不慣れな生徒など、授業に不安を抱えた生徒が多数在籍しています。

《令和2年度本校生徒の状況》

中学校3年間の欠席日数が100日を超える生徒の割合 (入学年次生)	47.6%
--------------------------------------	--------------

発達障害・精神疾患等の診断のある生徒の割合 (全校生徒)	39.2%
---------------------------------	--------------

このような状況の中、本校では平成29年（2017年）3月に『ユニバーサルデザインの視点に立った「わかる」授業づくり 北斗高校版マニュアル』（以下、「マニュアル」）を作成し、「わかる」授業づくりに取り組んできました。今年度の教員に対するアンケートでは、このマニュアルを「授業の際に参考にしている」教員は88%、「授業に内容を反映させている」は85%となっており、十分活用されていることがわかります。また、「わかる」授業づくりに向けて「工夫している」と答えた教職員は79%と、生徒の実態に応じて、授業改善に努めていることがわかりました。

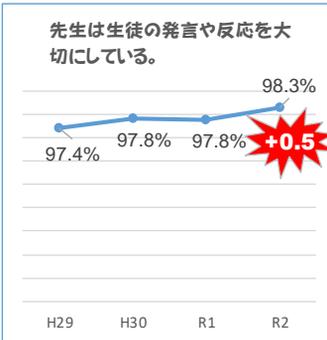
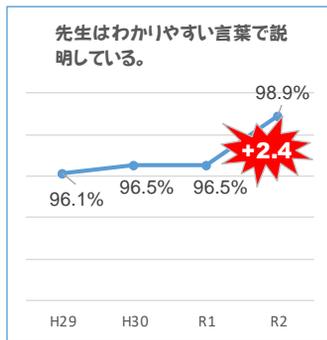
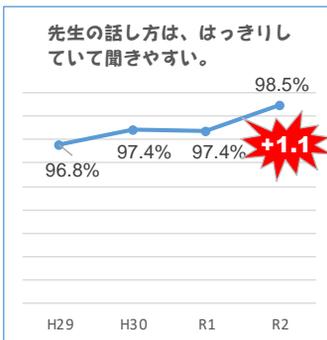
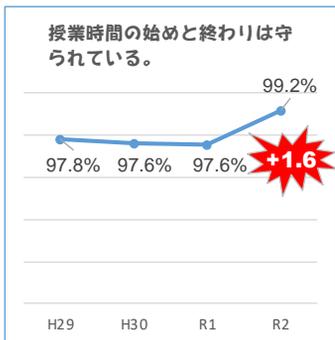
その結果、「生徒による授業評価」（次ページ参照）を見ると、授業の進み方、授業の内容、先生の話し方、指示や問いかけの明確さ、板書や資料の見やすさなど、15項目すべてで令和2年度は平成29年度に比べて上回る結果となっています。「わかる授業」づくりの成果が着実に表われているものと言えます。

この実践事例集では、「マニュアル」に掲げている「ユニバーサルデザインの視点に立った授業改善の5つのポイント」に基づき、それぞれのポイントごとに、実際に本校の教員が取り組んでいる21の事例を紹介しています。

「生徒による授業評価」において、「私は授業に安心して参加できる」と答えた生徒が98.3%となっているのは、とてもうれしいことです。今後はさらに「100%」を目指して、これらの事例を参考にしながら、すべての教員が「わかる授業づくり」の工夫に努めていきたいと考えています。



「生徒による授業評価」より 「そう思う」と「大体そう思う」の合計の過去4ヶ年の推移



ユニバーサルデザインとは？

「ユニバーサル」とは「普遍的な／全体の」という意味です。したがって、「ユニバーサルデザイン」とは、「すべての人のためのデザイン」であり、年齢や障害の有無、体格、性別、国籍などにかかわらず、できるだけ多くの人が利用できるようなデザインのことをいいます。

ユニバーサルデザインの視点に立った授業とは？

授業づくりに
おいて、本校
の教員は日々
悩んでいます。



さまざまな背景を持つ生徒がいて、定着にばらつきが出てしまう・・・
どういった授業にすればいいの？

ユニバーサルデザインの視点に立った授業とは、特別な支援が必要な生徒には「ないと困る」支援、その他の生徒には「あると便利で・役に立つ」支援を含む授業です。

その結果、「すべての生徒が、楽しい、わかる、できると感じる授業」が実現します。

ユニバーサルデザインの視点に立った授業は、授業のレベルを下げるということではありません。

教室内の刺激量の調整をしたり、選択肢を提示したり、話し合い等の活動を取り入れたり、視覚的支援をプラスしたりして、どの生徒もゴールにたどりつけるようにすることがねらいとなります。



ユニバーサルデザインの 視点に立った授業

実践事例

授業の流れ、組み立てを生徒に示しています。

《時間の構造化》



今何をやっているのか
わからなくなると、不安になります・・・

発達障害を抱える生徒や、不登校などにより社会経験不足の生徒には、急な予定変更や急な指示に対応できず混乱する、空気を読んで周囲と進度を合わせることが苦手などといった特徴が見られます。

つまり、学習内容がわからなくなる前に、学習活動の「迷子」が起きている場合があります。

以下に記すような、授業での学習活動の流れや組み立てを示す工夫があると、その授業時間内での自分の「過ごし方」を確認することができ、次に何をするのか見通しを持った学習ができます。

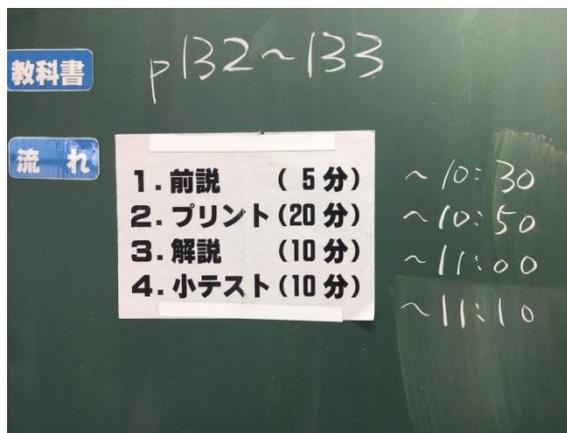
これを「時間の構造化」と言います。

■本校では・・・

本校は単位制のため選択授業が多く、生徒のほとんどは毎時間教室を移動します。また、休み時間は5分と短く設定しており、次の授業に遅刻をしないように厳しく指導しています。

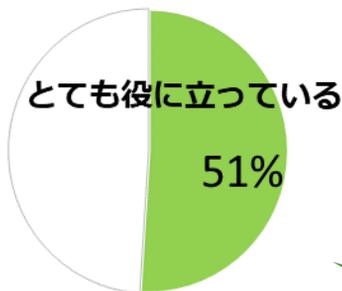
授業は「ベルと同時に始まり、ベルと共に終了する」ように、教師はあらかじめ授業内容を精選し、授業時間内（本校は45分）で収まるように工夫し、その時々に応じて授業内容を調整しています。

授業の流れを決まった手順にルーティン化しています。



左の写真のように、この授業では、毎時間、「前説→プリント解答→解説→小テスト」と、授業の流れを固定化し、ルーティン化しています。

このことにより、授業のたびに「今日は何をやるんだろう？（やらされるんだろう？）」という不安に駆られることがなくなります。



流れが決まっているし授業に取り組みやすい。

ルーティン化されていると、毎授業、何をするのか予測できるので役立つ。

決まっていることの繰り返しなので、不安が少ない。

■コラム① 「人的環境のユニバーサルデザイン」について

教師の言葉遣いは、刺激に弱い生徒に大きな影響を与えるものとなります。教師の言葉が必要以上に多かったり、怒鳴ったり、感情的になったりすると、それがたとえ自分に向けられたものでなかったとしても、自分が叱られているような感覚に陥ることもあります。

本校では、できるだけ「肯定的で、丁寧な言葉遣い」を心がけています。

実践事例 #2

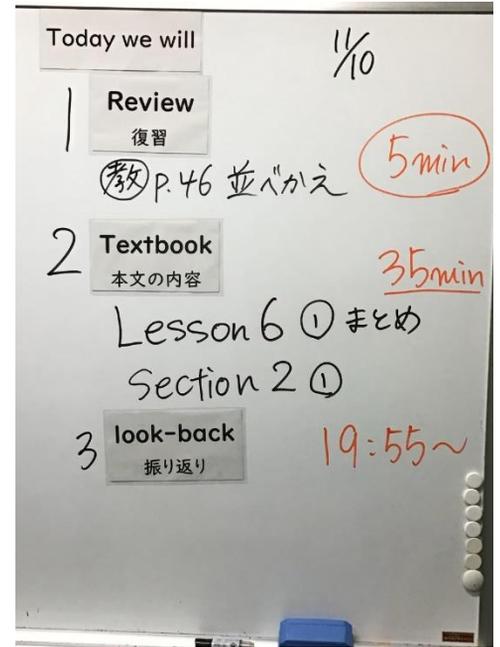
授業の流れや活動を黒板に書き、視覚化しています。

授業の導入時においては、
「ひきつける」
「方向づける」
「おすびつける」

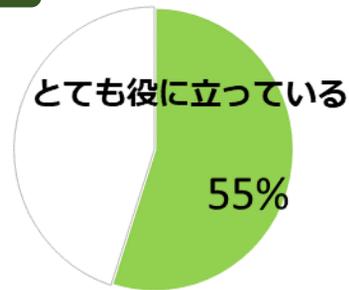
という3つの柱が大切との指摘があります。

発達障害がある生徒の中には、聴覚の認知が弱い特性を持つ生徒もいます。

そこで、言葉での説明だけでなく、黒板やホワイトボードに授業の流れや内容を示しておくことにより、授業全体の見通しを、目に見える形でいつでも確認できるようにしています。



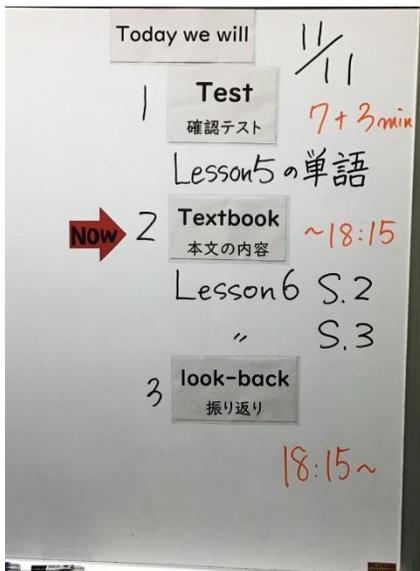
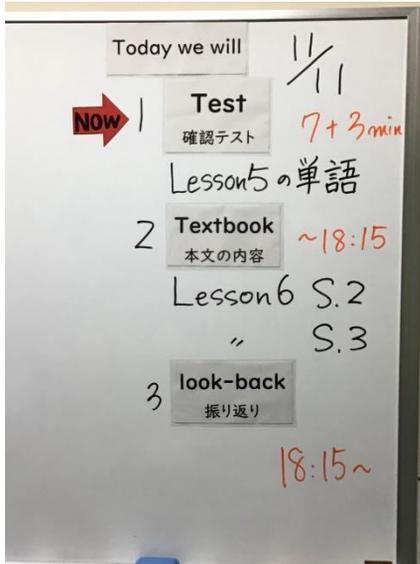
生徒の反応



授業中の流れが見えているので授業中のプリントが終わった後、やればよいことが分かる。

流れが黒板に書いてあると、次に何をやるのかわかりやすい。

「今何をしているか」をわかるようにしています。



カラーのマグネットシートや磁石など、「今何をしているか」を視覚化することで生徒はいつでも本時の学習内容を確認することができます。

マグネットの代わりに学習内容を消したり、チェック印をつけたりする方法もあります。

「授業の流れ」がいつでも確認できることによって、授業中迷子になってもすぐ確認ができ、安心感が生まれます。

生徒の反応



とても役に立っている

55%

ぼーとしていることがあって、どこまで進んだか分からなくなることがあるので助かります。

時々何をしているのか置いていかれることがあるので助かる。

2 板書の仕方を工夫しています。

《板書の工夫》



ノートに写す作業が苦手で、時間内に書き切れなくて困っています・・・

発達障害がある生徒や、不登校などにより学習空白のある生徒には、黒板からノートに書き写すまでの短時間でも、文字や内容を記憶しておくことが難しい生徒もいます。そのため、視写や書字に苦手意識のある生徒も多くなっています。

そのような生徒のために、文字の大きさに配慮したり、チョークの色分けをしたりしています。また、そもそもノートに書き写す作業を減らすため、板書の内容を精選することも大切です。

実践事例 #4

プリントを活用して板書の書き写しを減らしています。



あらかじめプリントを作成して配るなど、生徒の現状に合わせて板書内容を精選し、板書の書き写しを減らすようにしています。生徒は授業時間内にすべての書き写しができるため、安心感を持つことができます。

生徒の反応



とても役に立っている

54%

板書の量が少ないので、書くスピードが遅くてもすぐに内容に追いつけます。

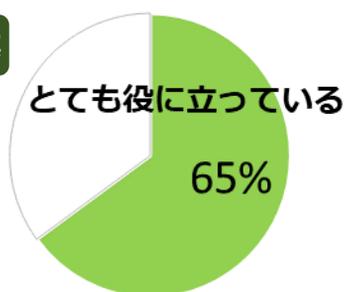
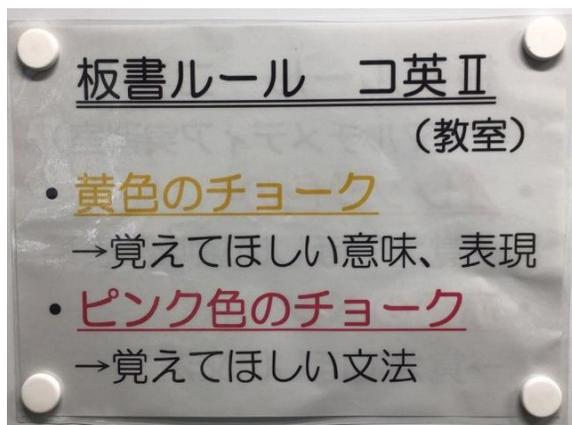
プリントがあるのでテスト勉強しやすい。

書き写しという作業が減るぶん、効率もいい。

チョークやペンの色に一貫性を持たせ、使い分けています。

年度始めに「使い分けルール」を生徒に説明をし、定着するまで掲示しておくことで重要度がわかる授業となります。

また、コントラストによって、チョークの色が見にくい、判別しにくい場合があります。黒板では赤、緑、青色など暗い色のチョークは見えにくい場合があるので避けるようにしています。



数学などで関連があるところは色チョークで同じにしたりしてくれていて役立っています。

色の使い分けやアンダーラインを引くことで大切なことが分かり、勉強しやすいので役立っている。

■コラム② 「学校における色のバリアフリー」について

色覚異常の児童生徒がいることを踏まえた「学校における色のバリアフリー」という教員向け教材（ネット上に掲載）によると、黒板の場合、「白と黄のチョークを使い、赤（ピンク）や青は下線や模様を書くのにとどめる」とあります。また、ホワイトボードの場合は、「主に青のマーカーを使い、青以外の色として、赤・緑・黒のマーカーを（区別せずに）使う」としています。赤・緑・黒のマーカーは、白い背景では区別しづらいからとのこと。

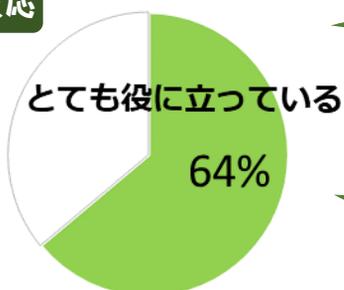
全員が見える大きさを確認し、難しい漢字にはルビを振っています。

板書の際に、後ろの席の生徒に見えるかどうか確認しています。また、生徒が読めないと思われる漢字にはできるだけルビを振るようにしています。

また、書画カメラを使用することで、文字の拡大が簡単にできます。漢字の読み書きが苦手な生徒だけでなく、後ろの席に座っている生徒も確認しやすくなります。



書画カメラを使用



視力の悪い私でも見える文字の大きさととても助かっている。

漢字が読めない時があるので助かる。

大きさを調整して書くことによって後ろの席でも見やすいので助かっている。

■コラム③ 「わからないこと」を伝える支援について

授業内容がわからないために固まってしまうたり、わからないことを教員や周囲に伝えられなかったりする生徒もいます。

そんな生徒のために、「ヘルプカード」を使いましょう。自分がどこにつまづいているのかを記した「ヘルプカード」を机の上に置いておき、巡回指導の際に教員やまわりの友だちに示すのです。

「わからないことを伝える」工夫です。



3 指示の仕方に配慮しています。

《指示の配慮》



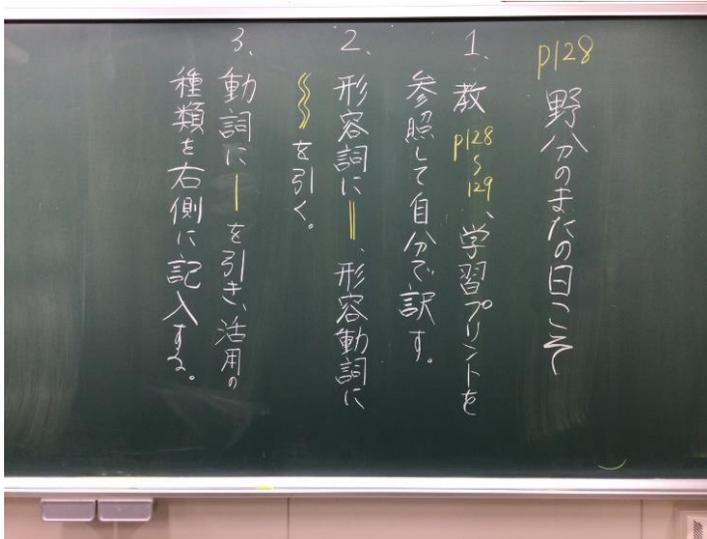
指示があいまいだと、授業中、戸惑ってしまうことがあります。

音声だけの情報を上手に理解することが苦手だったり、注意散漫になりがちで授業の波に乗れない生徒もいます。

そのため、言葉だけでなく指示を板書でも示す、指示を何度も繰り返す、教師が説明する時間を限定するなどの配慮をしています。

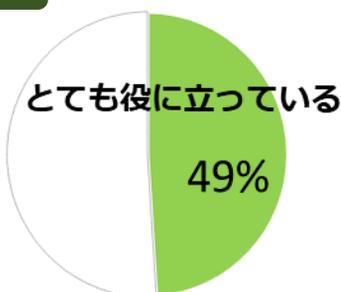
実践事例 #7

指示を板書して、目で見て確認できるようにしています。



言葉での指示と合わせて、黒板に指示を書くことにより、生徒は「次に何をすればいいのか」をいつでも確認することができます。

生徒の反応



たくさんの指示を聞くだけだと忘れてしまうので助かる。

何をすればいいのか話を聞き逃しても、黒板を見れば分かるので助かっている。

実践事例 #8

大切なことは繰り返して説明する。

重要語句や本時で覚えてほしい言葉などを繰り返し説明することで、生徒自身も「これは大切」と意識して聞く姿勢になります。



生徒の反応



とても役に立っている

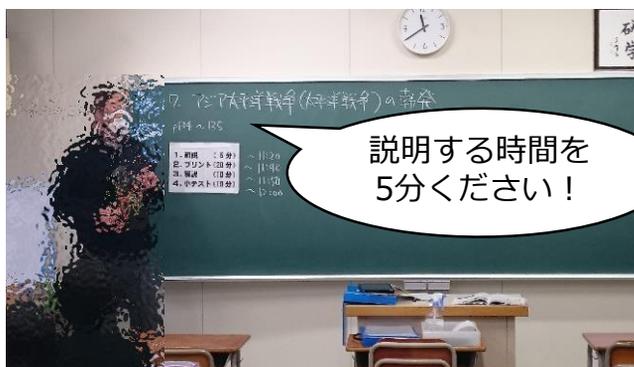
60%

大事な部分を聞き逃さないようになるので役立っている。

大切なことを繰り返し聞くことで覚えやすくなるので役立っています。

実践事例 #9

説明の時間を限定し、聞くことに集中できるようにする。



説明する時間を5分ください！

解説や説明する時間を限定することで、生徒が集中して説明を聞くことができます。

また、あらかじめ説明する時間を伝えることで見通しを持つことができます。

生徒の反応



とても役に立っている

50%

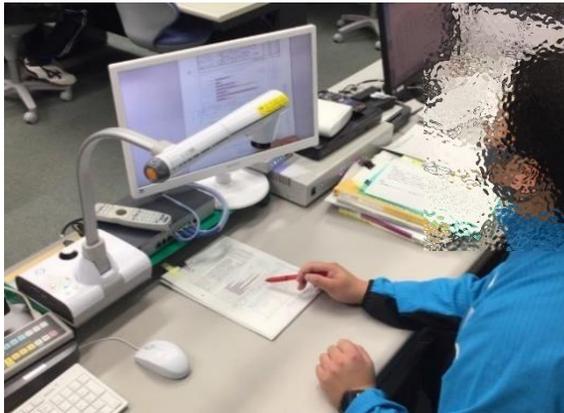


実践事例 #10

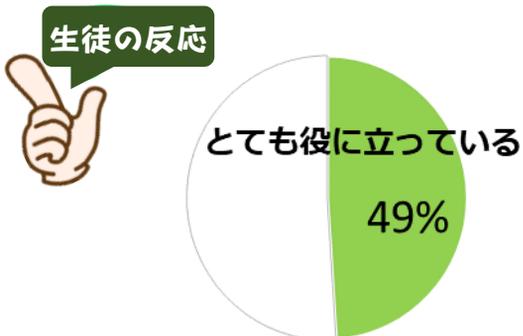
書画カメラで見て欲しい場所を実際の映像で明確に示す。



資料集や地図などを用いて説明するとき、示したい図やイラストを拡大することができます。



実物を示して次に行う動作を確認しています。



4 課題プリントの作り方を工夫しています。 《プリントに関する配慮》



どのように解いたらいいのかわからなくなる時があります。

課題プリントの解き方が分からない、問題で何を聞かれているのかわからず、戸惑ってしまう生徒がいます。

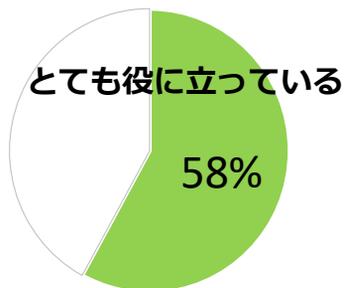
課題プリントを作成する際には、「わからない生徒」を想定した工夫が必要です。

実践事例 #11

基本問題を繰り返し解く

授業で学んだことを繰り返し復習するようなプリントを作るようにしています。どの生徒にとっても内容を理解し、習得する機会になります。また、「わかった」という体験が増えることで、自信もつき、自己肯定感も高まります。

生徒の反応

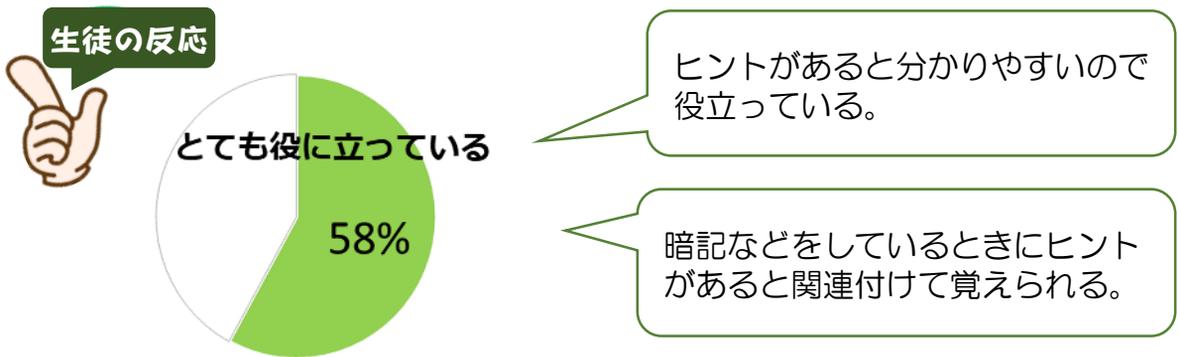
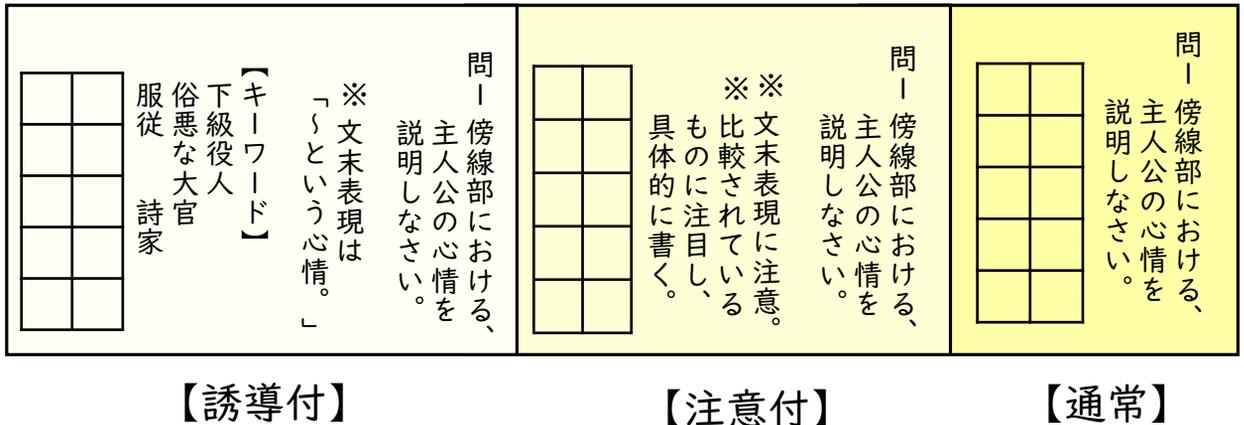


何度も解けるのでありがたい。

基礎がよくわかるので役立っている。

ヒントを記載し、生徒が自力で問題を解けるようにする。

生徒集団の状況に応じて、ヒントの難易度を調整しています。生徒が自力で問題を解くことで達成感が得られます。



5 情報機器を活用しています。

《視聴覚機器・教材やICTの活用》

「わかる授業」を補助するために、様々な視聴覚機器や情報機器をツールとして使用しています。その際、それぞれの機器の機能や特性を理解した上で、授業のねらいに沿った使い方をしています。

実践事例 #13

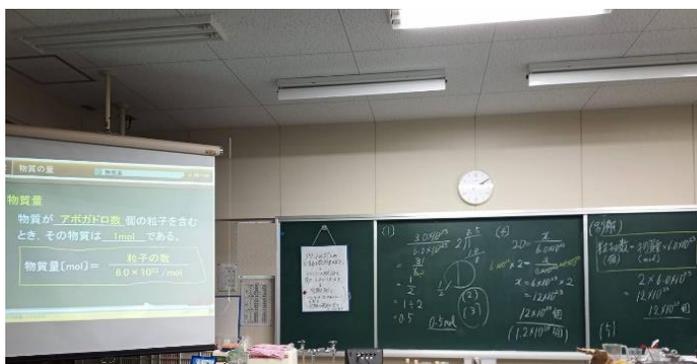
流れや説明をパワーポイント等プレゼン用ソフトで示しています。

黒板の横にスクリーンやモニターを設置して、パワーポイント等のプレゼン用ソフトで作成した授業の流れや説明を投影しています。

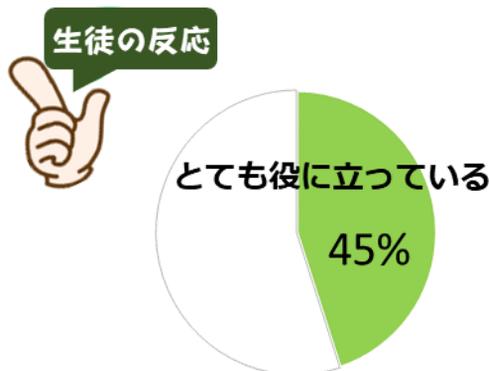
また、必要に応じてグラフやデータなどを示すためにも使っています。

プレゼン用ソフトは、パソコン上で修正が容易にできるため、臨機応変に活用できるメリットがあります。

ただし、プレゼン用ソフトを使う場合には、板書とのすみわけ、使い分けをきちんとし、生徒が混乱しないようにすることが大切です。

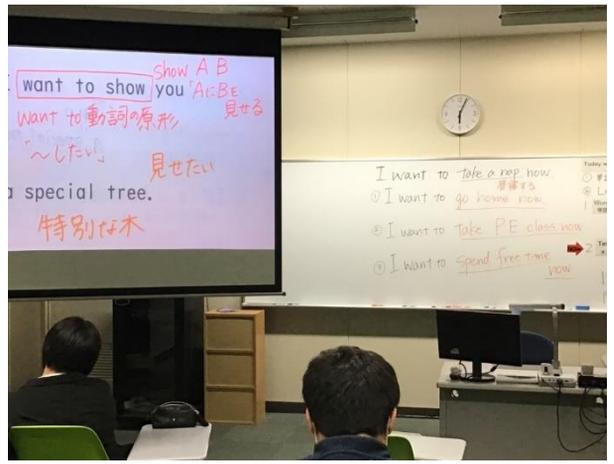
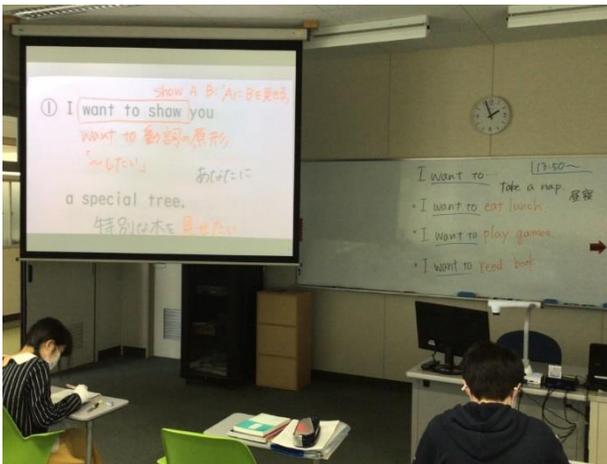


黒板とモニターのすみわけ





生徒が発表する際に自分たちが準備した題材（画像）を書画カメラで共有しています。



本文中の英文法の演習として、モニターに表示しながら、ホワイトボードで他生徒の意見や考えを共有しています。

■コラム④「フォント」について

人は視覚から得る情報の中で、文字情報が大きな割合を占めています。学習障害、特に読み書きに困難さがある生徒にとって、文字のフォントによってストレスを感じやすく、イライラしてしまう、集中力が続かないという報告があります。

また、電子黒板、タブレットといったICT機器を活用する際、一般的な教科書体を使うと、席が離れている、窓際に座っているといった状況で視力に問題がなくても文字が見えにくくなることがあります。

「UDデジタル教科書体」（この文章のフォント）は障害の有無に関わらず、さまざまな状況の生徒にとって、読みやすいとされています。

〔フォント例〕

「一般的な教科書体」

山 追 令 心 さ

とめ、はらいが自分に刺さっているようで怖い！と感じることがあります。

「ゴシック体」

山 追 令 心 さ

手書きと違って、画数、形が異なって分かりにくいことがあります。

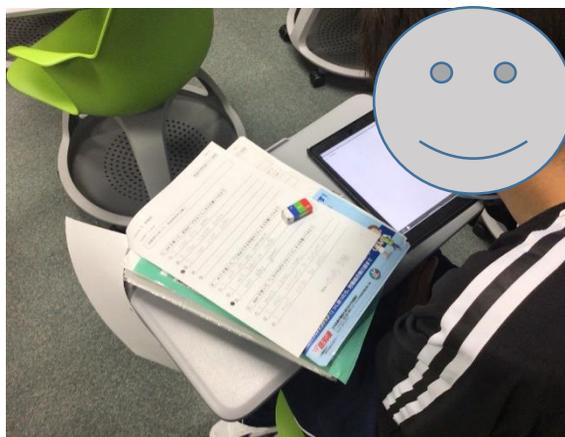
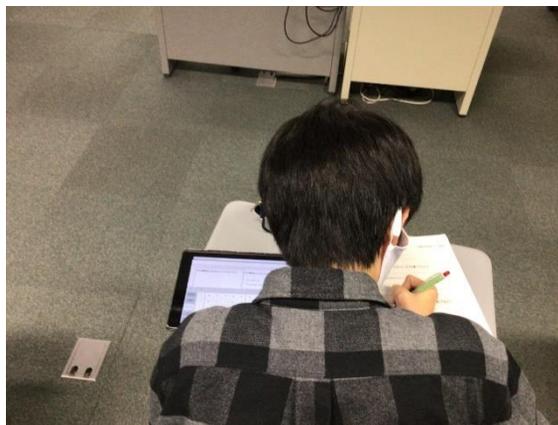
「UDデジタル教科書体」

山 追 令 心 さ

実践事例 #14

調べ学習の際にiPad※を使用しています。

各自がiPadで英単語の意味や発音を確認する時間を設けています。また、各自が授業の内容を深めるために、インターネットを使っています。



生徒の反応



とても役に立っている

49%

分からない意味・漢字で固まっているので、iPadがあると助かる。

iPadやパソコンを使った授業は、楽しく分かりやすいのでうれしい。

※iPad

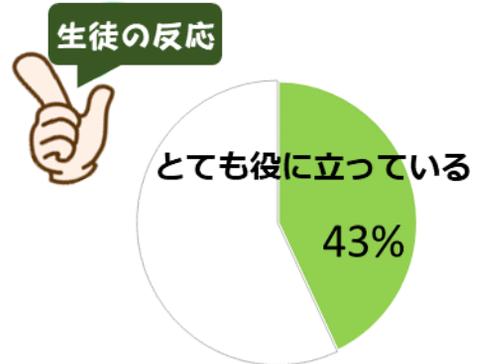
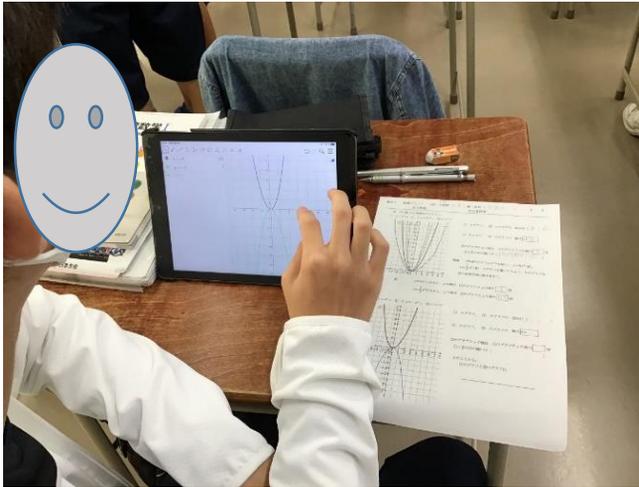
米国アップル社が開発したタブレット型端末。本校には、令和3年3月現在、生徒用に40台を整備している。



実践事例 #15

iPadを活用してグラフや図をイメージできるようにしています。

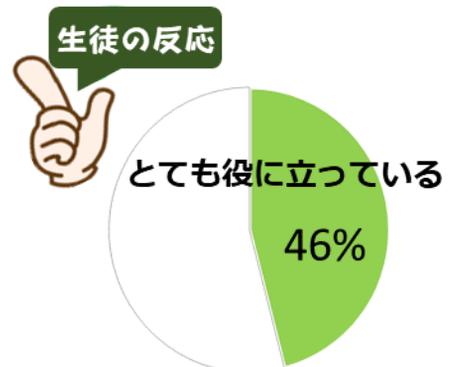
図やグラフをiPadで示したり、拡大したりすることで、よりイメージしやすくしています。



実践事例 #16

複数のモニターを設置して、パソコンの入力作業を確認しています。

生徒の作業をモニタリングし、生徒の課題を把握するようにしています。

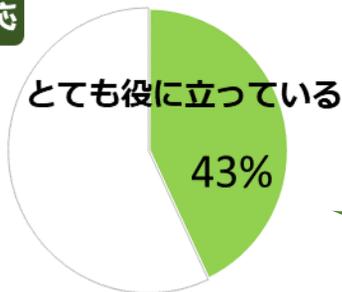


■ 学習の到達度を知る工夫として

実践事例 #17

毎時間小テストを行っています。

毎時間授業のはじめに小テストを行い、前の時間に学んだことを復習する機会を設けています。生徒にとっては前回の復習となり、教師は生徒の定着度合いを知ることができます。

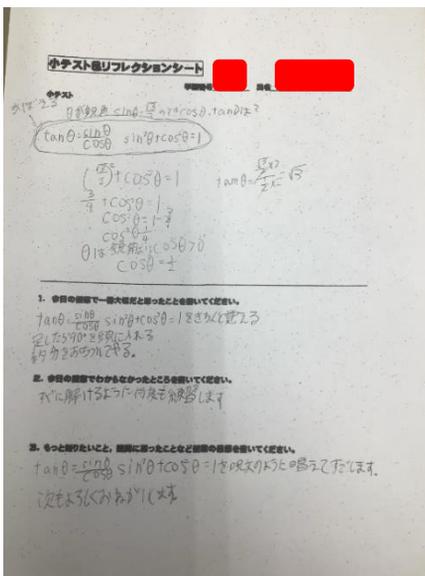


前の授業を忘れているときがあるから、小テストをやるとだいたい思い出すので助かる。

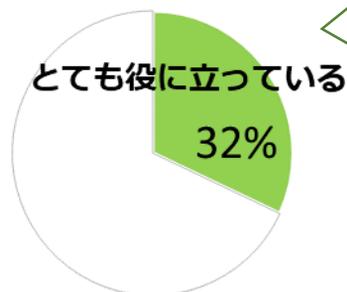
毎時間小テストがあると家で勉強するきっかけになるのであった方がいい。

実践事例 #18

授業の感想や質問をふりかえりシートに書かせています。



ふりかえりシート（リフレクションシート）を用いて、学習内容を振り返り、説明や内容を思い出す作業をさせています。



授業中に質問できなかった時、ふりかえりシートを通じて先生に質問し、解決できています。

ルーブリック評価※を取り入れ、生徒自身が到達度を評価できるようにしています。

※ルーブリック評価とは？

生徒の学習到達状況进行评估するための評価基準を「ルーブリック」といいます。ルーブリックは複数の項目で構成されますが、それらを一覧にしたものを「ルーブリック表」と呼びます。ルーブリック表を使って評価する方法が「ルーブリック評価」です。

各教科の授業単元にある「興味・関心・態度」、「知識・理解」といった評価の観点に基づき、評価の基準として

S：素晴らしい

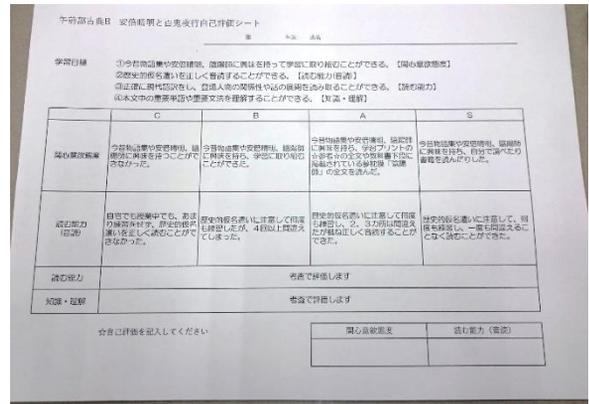
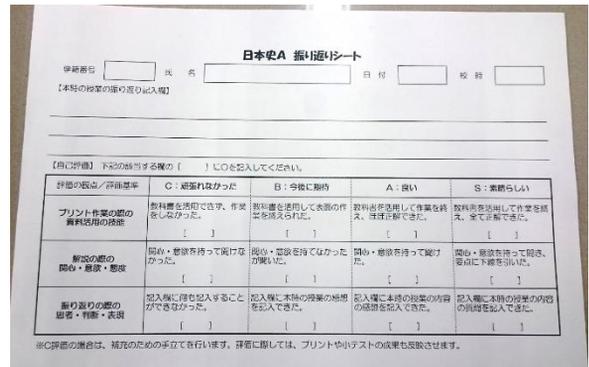
A：良い

B：今後に期待

C：がんばれなかった

といった4項目を設け、生徒がその授業でどこまで到達できたかを生徒自身が評価します。

生徒が評価のポイントを具体的に知ることで、意欲喚起につながったり、安心感を高めるきっかけになったりしています。

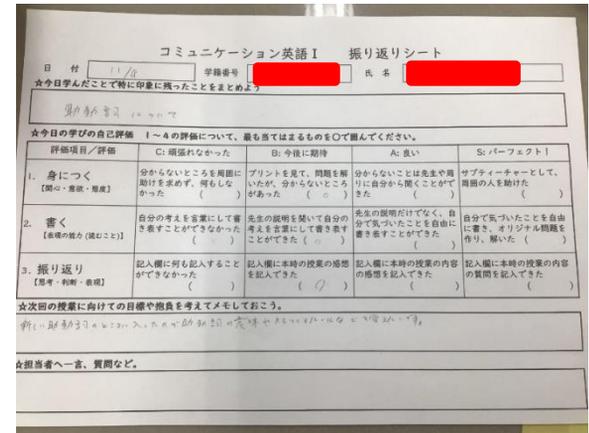
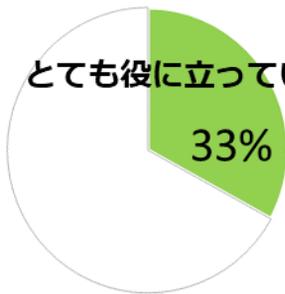


生徒の反応



とても役に立っている

33%



■ 生徒が発表しやすくするための工夫として



発表の時、緊張で体調が悪くなる。

答えが分からないとき言いにくい、授業が止まる。注目が怖くて発表したくない。たくさんの人の前で発言したくない人もいると思う。

授業中に突然指名されて、答えや自分の意見を発表することについては、多くの生徒が歓迎しないものです。

特に、発達障害がある生徒は、指名されても教員の質問や指示の意図が分からず間違えてしまったり、そのことでさらに自信をなくして発表できなくなったりすることがあります。

どの生徒も安心して発表しやすいようにハードルを下げ、「参加の促進」をする必要があります。

実践事例 #20

発表を予約制にして、事前に発表内容を紙に書かせています。

授業で3つの問題を発問し、生徒個人で考える前に「どれを発表したいか」と先に決めます。先に答える内容を知ることで、自分が担当する問題を集中して考え、発表することができます。

さらに、発表する内容については、あらかじめノートに記入しておき、場合によっては、それを読み上げる形でもOKとしています。



■ 協働的な学びを促進するために…

実践事例 #21

ペア学習・グループ学習を心がけています。

ペアやグループでの学習や話し合いの場で自分の意見を言葉にしたり、他のメンバーからアドバイスを得ることにより、生徒は自分の考えを確認したり、深めたりすることができます。



また、ペア学習やグループ学習においては、メンバーそれぞれの持ち味が発揮されます。例えば、文字を書くのは苦手だがアイデアや意見を思いつくことができるAくんがいるとします。ペアやグループで課題に取り組むことで、Aくんの得意な部分を生かした活動をすることができます。書字の部分は、それが得意なBくんが行い、発表はCくんがするなど、それぞれが得意なことを生かし、苦手なことを補い合うことにより、協働的な学びの経験が得られます。

本校の場合、単位制のため、部（午前部・午後部・夜間部）や年次（学年）の違う生徒と一緒に学ぶ授業があります。人と話すことが苦手な生徒にとって、初めて話す生徒と活動することに抵抗感を持つ生徒もいます。

その際、ペアやグループの編成をする際には、十分気を付けるようにしています。



●参考文献・資料

- 1 阿部利彦『通常学級のユニバーサルデザインスタートダッシュQ&A 5 5』
(東洋館出版社, 2017)
- 2 阿部利彦／赤坂真二／川上康則／松久眞実『人的環境のユニバーサルデザイン』
(東洋館出版社, 2019)
- 3 阿部利彦『決定版！授業のユニバーサルデザインと合理的配慮』
(金子書房, 2017)
- 4 小貫悟『授業のユニバーサルデザイン入門』 (東洋館出版社, 2014)
- 5 『英語教育』2019年10月増刊号 pp.46～47 (大修館書店)
- 6 阿部利彦『通常学級のユニバーサルデザイン プラン Zero』
(東洋館出版社, 2015)
- 7 阿部利彦 『通常学級のユニバーサルデザイン プラン Zero2 授業編』
(東洋館出版社, 2015)
- 8 彼方始『考えよう 学校のカラーユニバーサルデザイン』 (教育出版, 2013)
- 9 青森県総合学校教育センター『ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて』 (2017)
- 10 さいたま市教育委員会『ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業づくりガイドブック』 (2019)
- 11 神奈川県立総合教育センター『教育のユニバーサルデザイン ～小中一貫教育(小中連携)の視点から～』 (2018)
- 12 藤枝市教育委員会『ユニバーサルデザインの視点を取り入れた「授業づくりの工夫」』 (2019)
- 13 文部科学省『色覚に関する指導の資料』 (2003)
- 14 株式会社 モリサワ Morisawa Magazine 2019 秋号, 2019冬号, 2020春号
- 15 公益社団法人 日本眼科医会 『学校関係者のための学校における色のバリアフリー』 (2019)

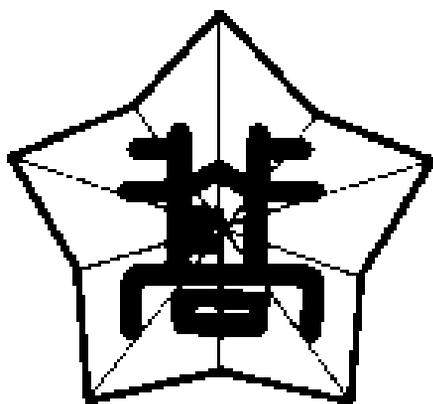
参 考

ユニバーサルデザインの視点に立った

「わかる」授業づくり

北斗高校版マニュアル

(2017.3)



生徒が「わかる」「できた」を
実感できる授業づくりのために



【目次】

- 北斗高校生が求める授業とは？ …… P. 1
- 気になる生徒はいませんか？ …… P. 2
- 発達障害に関する基本事項 …… P. 3
- 「ユニバーサルデザイン」の視点とは？ …… P. 4
- 「授業時間の構造化」について …… P. 5
- 「板書の改善」について …… P. 6
- 「明確な指示」について …… P. 7
- 「プリント作成への配慮」について …… P. 8
- ICTの活用について …… P. 9
- さいごに …… P. 10



● 北斗高校生が求める授業とは？

アンケート調査によると、本校の生徒は

要点が色分けされた簡潔な板書で
わかりやすいプリントを使い
一人ひとりがわかるまで対応する

授業を求めています。

発達障害や不登校による学習の空白など、
各自の特性やこれまでの経験が理由になって
いることが多いです。

また、休み時間が5分と
短いため「授業時間内に
ノートが書ききれないようにしてほしい」という意
見が多く出されました。



● 気になる生徒はいませんか？

生徒に対応していて「あれ？」と気になったことはありませんか？今日の学校現場では、次のような生徒に配慮する必要があります。あくまで一例ですが、周囲の生徒を思い出し、チェックしてみましょう。

【発達障害の疑いのある生徒】

☆ 自閉症スペクトラム障害

発達障害の分類の1つで、社会性やコミュニケーションに困難を抱える障害。以前「自閉症」「アスペルガー症候群」など、別々に分類されていたものを、1つの連続した症状としてまとめたもの。

☆ ADHD（注意欠陥多動性障害）

多動性・衝動性と注意力の障害を特徴とする行動の障害。どの症状が現れるかによって、「多動性-衝動性優勢型」・「不注意優勢型」・「混合型」に分けられる。他の精神的障害（うつ等）を合併していることも多い。

☆ 学習障害（LD）

明らかな知的遅れが無いのに、学習面において特定の領域で困難を伴う障害。「読む・書く・聞く・話す」や「計算する」「推論する」などに大きな困難が生じ、1つだけでなく、複数の領域に渡ることもある。

☆ 発達性協調運動障害

目と手、足と手など、個別の動きを同時に行うことに著しい困難を示す障害。キャッチボールができないとか、消しゴムを使うと紙が破れてしまうなど、複雑・繊細な作業に顕著に現れる。

【虐待による愛着不全（身体的・精神的・性的・ネグレクト）】

虐待が長期間に及ぶと、脳機能に障害を発症し、発達障害と同じような症状を呈することがある。

● 発達障害に関する基本事項

2ページに記載した通り、発達障害と言っても症状の現れ方は様々であり、どのような配慮が生徒に効果的なのか判断が難しいものです。ここで、まず発達障害に関する基本事項を確認しておきましょう。

【発達障害とは】

- ☆ 脳の機能障害によって生じる、精神発達障害の1つである。
(中枢神経系の障害である)
- ☆ 発達期(18歳未満)に発現する障害である。
- ☆ 症状は恒久的に、または長期間続く。具体的な症状の現れ方は発達と共に変化するが、症状・特徴は持ち続ける。

【発現する障害】

- ☆ 知的障害 = 発達の量の不足という状態
- ☆ 発達障害 = 発達の質の偏りという状態

脳の発達の未熟さというより、歪みの状態にあって、正常に機能している部分と特異な働きをしている部分がある。

【支援の在り方】

- ☆ 生徒が生き方を身につけられるように工夫する。
- ☆ 生徒にどのように寄り添うことができるかを考える。
- ☆ 一方的に教え込むのではなく、生徒の良さをどのように伸ばすかを考える。
- ☆ 生徒が自分の困り感(障害・特性)に気づき、上手に付き合っていくことができる方法を身につけさせる。

● 「ユニバーサルデザイン」の視点とは？



様々な生徒がいるのに、
どういう授業にすれば
いいの？



学力差や発達障害の有無に関わらず、生徒全員が「わかる」「できる」よう工夫・配慮した授業を目指しましょう。

支援の必要な生徒には「無いと困る」
その他の生徒には「あると便利」

それが「ユニバーサルデザイン」の視点に立った授業改善です。

主なポイントは4つ！

- ① 授業時間の構造化
- ② 板書の改善
- ③ 明確な指示
- ④ プリント作成への配慮



基本となるポイントを確認し、それぞれの教科や科目に合った工夫をお願いします。

● 「時間の構造化」について

発達障害を抱える生徒や、不登校などにより社会性の乏しい生徒には“時間の使い方”に次のような特徴が見られます。

- ☆ 課題や作業の段取りが自分で上手にできない
- ☆ 急な予定変更や急な指示に対応できず混乱する
- ☆ 空気を読んで周囲と進度を合わせることが苦手
- ☆ 同時に複数のこと（聞く・書く・話す）ができない… など

そこで、生徒の現状に合わせて学習内容を精選し、授業の流れを視覚化するようにしましょう。あいまいな時間の使い方を避けることで、生徒が見通しを持ち、安心して授業に臨むことができます。

ホワイトボードやマグネットシート、ラミネートカードなどを活用し、黒板の脇に掲示しておきましょう。板書の妨げにならないければ、黒板の隅に書いて表示してもよいでしょう。

時間・課題の管理が苦手な生徒は、「わからなくなった時はボードを確認すればよい」と安心できます。またその他の生徒は、ボードを見て、教員からの指示を待たずに必要な道具を準備できます。

いま

- ① 本文を読む
(2人1組)
- ② 語句調べ
(10分間)
- ③ 内容説明
(ノート・質問)

※明日は読みテストをします。

授業前のひと手間ですが、教員・生徒がお互いに慣れてくると、とてもスムーズに授業を展開することができます。同じ教室を使用する教員同士で相談し、邪魔にならないようであれば、掲示の際に毎回使用する物を、ホワイトボード付近（教卓の中など）に置いておくのも良いでしょう。

● 「板書の改善」について

発達障害を抱える生徒や、不登校などにより学習経験の乏しい生徒には“**視写や書字**”に次のような特徴が見られます。

- ☆ 指先や手首の動きがぎこちないため文字が崩れる
- ☆ 黒板からノートに書くまで言葉を覚えておくのが苦手
- ☆ 基本的にノートをどのように書くかがわからない… など

そこで、生徒の現状に合わせて板書内容を精選し、できるだけ簡潔にしましょう。休み時間が5分と短く、遅刻に対しても厳しく指導していますので、授業時間内にきちんと書ききれる板書量を心がけてください。書く部分と示す部分を分けるなど、プリントも活用しましょう。色分けのルールを決め、何がどれくらい大事かわかると良いです。

3ページの「授業時間の構造化」も含め、授業内容を「簡単に・浅く」するものではありません。あくまでも生徒の苦手な部分に対応するということであり、難度の調整は生徒の現状に合わせて行いましょう。

学習のめあてを書く

「羅生門」芥川龍之介
場面設定を確認しよう

- ・いつ → ある日の暮れ方
- ・どこ → 羅生門の下
- ・誰が → 一人の下人
- ・どうする → 雨やみを待っていた

★冒頭で場面設定がわかる

「下人」の置かれた状況は？

人に雇われて雑用をする者

- ・きれいな字と程良い間隔
- ・囲みや記号を用いて強調

生徒がノートに写すことを考えた構成にする

書く時間と聞く時間（解説する時間）を分ける

● 「明確な指示」について

発達障害を抱える生徒や、不登校などにより社会性の乏しい生徒には“聞くこと”に次のような特徴が見られます。

- ☆ 一度に多くの指示を出されると理解できず混乱する
- ☆ 言葉のニュアンスや言外の「含み」を読み取るのが苦手
- ☆ 話している相手や聞くべき音（声）に集中できない
- ☆ 聞いた内容を覚えておくことができない… など

そこで、言葉による指示は2回出すなど、全員に適切に伝わるようにしましょう。ただし、説明を詳しくしようとして話が長くなると、集中が切れたり大事な点を忘れてしまったりするので、内容を区切りながら伝えてください。

また、耳からの情報が入りにくい生徒もいるので、併せて情報を視覚化する（指示と板書・プリントが一致するように話す）と良いでしょう。アバウトな表現、例えば「これくらい」「少しだけ」などの言葉では、不安や混乱が生じる場合もあります。「5W1H」を意識し、丁寧に具体的な指示をするようにしてください。



❗ 必ず注意を引いてから

特に配慮の必要な生徒には、目を見て伝える。

❗ 適度な声の大きさと調子で

早口にならないよう注意し、1つずつ話す。

❗ 具体的で丁寧な言葉づかいを

荒い言葉では「叱られた」と思い込む生徒もいるので、肯定的な言葉づかいを心がける。

❗ 指示を出す時の立ち位置も工夫

後ろから話しかけると、「自分は関係ない」と感じて聞かないことがあるので、生徒の視線に入る場所で話す。

● 「プリント作成への配慮」について

発達障害を抱える生徒や、不登校などにより学習経験の乏しい生徒には“**プリント学習**”の際に次のような特徴が見られます。

- ☆ 文字が歪んだり重なったりしているように見える
- ☆ 漢字や英単語が読めず内容が理解できない
- ☆ 枠や線が無い空白に自分で考えてメモするのが苦手 … など

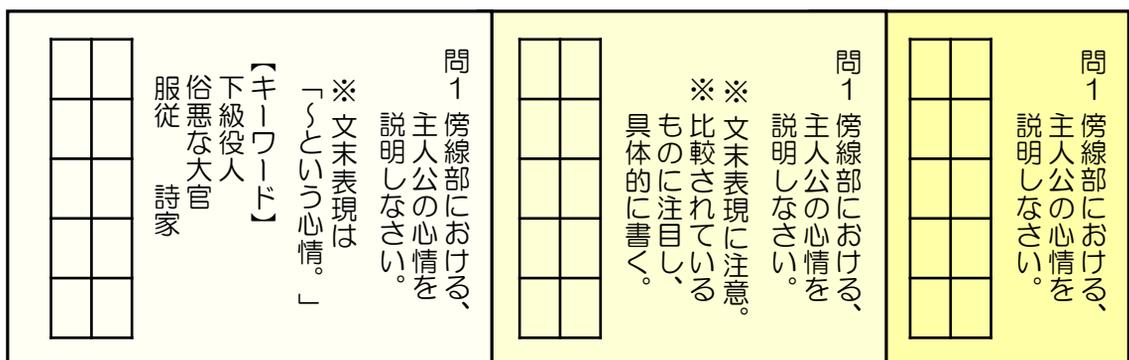
そこで、4ページの「板書の改善」と同じく、問題量・情報量を精選し、読みやすく書きやすいプリント作りを心がけましょう。

プリント作成時の工夫例

- ◆ 日付や教科書のページを示し、いつ何を学んだかわかるようにする。
- ◆ 文字の大きさやフォント、行間を調整し、読みやすい紙面にする。
- ◆ 口頭では伝わりにくい事柄を、絵や写真、図や表にして示す。
- ◆ どこに何を書くか、板書とプリントを対応させ、記入欄を設ける。
- ◆ 漢字には適度にふりがなを付ける。

難度を調整したプリント作り

- ◆ スモールステップを意識し、課題量を調整する。
- ◆ 生徒たちが受け入れやすく、学力のばらつきにも対応できるよう、いくつかの難度に分けて準備する。（基礎 → 反復 → 発展 → 応用）
- ※ 高校では一斉授業を基本とするため、複数の種類のプリントを毎時間準備するのは難しいと思います。同じプリントで学習しながら、全体で少しずつ難度を上げていくと良いでしょう。ただし、周囲より作業が早い生徒には、さらに練習問題を提示できるよう準備しましょう。



【誘導付】

【注意付】

【通常】

易しい ←————→ 難しい

● ICTの活用について

社会経験の乏しい本校生徒は、教科書（授業）に登場する人や物についての知識も無く、メディアを通してでさえ「一度も見たことがない」という生徒がたくさんいます。

また、授業のユニバーサルデザイン化を図り、板書や口頭で適切に指示を出しても、それでも何をどうしたらいいか不安に思う生徒もいます。

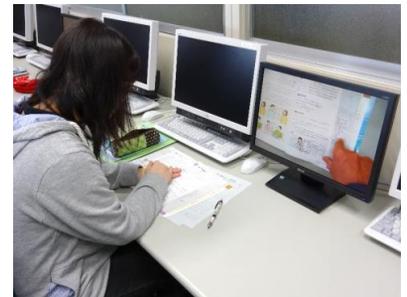
そこで本校では、i-Padやモニターなどを活用し、学習・作業内容の視覚化に役立てています。情報処理実習室・総合実践室・マルチメディア実習室などを活用して、生徒に視覚的情報も併せて示し、「わかる」授業づくりに役立ててください。



生徒の授業での活動を記録し、本人が見て振り返りができるようにする。タイマーアプリは、時間の構造化に役立つ。

調理実習のように作業手順が決まっているものは、画像と共に検索し、確認しながら進めることができる。

参照するページや解いている問題を、教員の解説と同時にモニターで映すことにより、生徒が作業に遅れないようにする。



可動式のモニターを使用教室に運んで使用することもできる。スクリーンに映し出された海外の画像に、生徒も興味津々!!

● さいごに

このマニュアルに記した手立ての他にも、生徒のために配慮する方法は様々あります。また、先生方のこれまでの経験から導き出された、より効果的な方法もあるでしょう。

ここで忘れてはいけないのが、「わかる」授業づくりの方策がその効果を発揮するためには、実施する環境と対象（生徒）に合っていないなければならないということです。つまり、「〇〇高校ではうまくいったのに、北斗ではしっくりこない」とか、「午後部の生徒には受け入れられたのに、夜間部の生徒にはもう少し工夫が必要だ」といったことが起こり得るのです。

まず第一に、担当する生徒の現状を正しく把握し、理解してください。ポータルサイトの「生徒情報管理」を参考に、教員間の情報共有をしましょう。生徒の小さな言動の変化が、のちに手立ての大きなヒントになるかもしれません。現在では、発達障害生徒への対応や授業のユニバーサルデザイン化について、インターネットにも多くの情報が公開されています。ぜひ参考にしてみてください。

そして、効果のあった教科指導の方法やうまくいった生徒対応の事例などを、さらに教員同士で共有しましょう。もし失敗しても、何が原因かを振り返り、次の指導に生かしていきましょう。生徒のために、教職員一丸となって実践し、指導の引き出しを増やしていきたいと思います。



【参考例】
国立特別支援教育
総合研究所

ユニバーサルデザインの視点に立った 「わかる授業」づくり実践事例集

令和3年3月1日発行

青森県立北斗高等学校

(定時制の課程)



〒030-0813

青森市松原二丁目1番24号

電話 017-734-4464

FAX 017-774-1047

<http://www.hokuto-h.asn.ed.jp/teijisei/index.html>